

# 北海道蘭越 高等学校紹介

生徒が行く「オーストラリア留学」  
校長先生が考える「学ぶことの意味」

作者

北海道蘭越高等学校 校長 上野直幸

北海道蘭越高等学校 小泉大地

## 蘭越高等学校紹介

＝地域に愛される活力あふれる学校を目指して＝

### 【目指す学校像】

- 1 自主性を育み、心の触れ合いを求めて明るく協調性に満ちた学校
- 2 個性や適性を把握し、個に応じたきめ細やかな教育活動を展開する学校
- 3 地域の教育資源を活かし、地域と共に歩む学校

### 【目指す生徒像】

- 1 自ら意欲的に学び、努力する生徒
- 2 自然を愛し、故郷を愛する、思いやりのある生徒
- 3 心身を鍛え、協働する生徒

---

### 《特色ある教育活動》

#### ①英語、数学での習熟度別授業

- ・少人数でレベル別クラスで基礎学力の定着・向上を図る。

#### ②2年次よりコース別選択で幅広い進路に対応（大学・就職等）。

#### ③地域の自然を活かした授業

- ・遠足（ラフティング）、地域と自然（尻別川の調査等）など

#### ④高大連携（千歳科学技術大学eラーニングシステム）

- ・コンピュータを使った学習システムの導入（英語等）

### 《地域との連携》

#### ①キャリア教育

- ・町内企業見学会、卒業生との懇談会、インターンシップ等

#### ②模擬町議会、公開授業、町内クリーン作戦、ロードレース等

#### ③除雪ボランティア、交通安全街頭啓発運動等

## 《町からの補助》

①制服代無料、教科書代無料、通学定期代全額補助

各種検定料の半額補助、行事・部活動での町のバス利用無料  
オーストラリア短期留学費用補助

②ホームヘルパー2級資格取得（無料）

③学校給食の実施

ホームページ <http://www.rankoshi.hokkaido-c.ed.jp>

## 「オーストラリア留学」 小泉 大地

中学3年の冬。進路を決定する時期。自分は、この高校に行って何をしたいんだ？と思ったことがあった。そして考え付いたのは、「国際交流に参加する！！」だった。中学を卒業して、高校に入学した。

自分のクラスメイトは、19人。普通の高校に比べたら、少ないのである。全校生徒も、60人を切る程の学校である。でも、その高校は、色々な免除があり、地域の皆さんの協力でこうして学校に通ってる。

さて、本題に入りましょう。自分が、高校に入学してやること、それは私が通う高校の特色である、国際交流事業に参加するって事だ。普通に過ごし、夏休みが終わった頃、国際交流事業の参加希望調査が来たのである。私は、すぐ応募した。でも、そう簡単に行くことは出来なかった。小論文を書いたり、日本語と英語の両方の面接があったり、その準備で忙しい毎日を過ごしていた。そして、面接も、無事終了することが出来た。でも、その時、私を含め、3人の応募があったのである。最初の話では、2人が参加できるという事を言われていた。無事面接も終わったが、心の中では、「落ちた。」と思っていた。でも、努力の成果は出たのである。ある日、学校にいつも通り登校した時である。玄関にあるボードに訪問メンバーの発表の紙が貼ってあった。俺は、そんなのに気づかずに、いつも通り教室に行った。クラスメイトに、いきなり「おめでとう！」と言われたのである。私は、何も知らないの、「何か起きたのか？」と聞いた。クラスメイトは、「玄関のやつ見てないの？」と言われた。私は、「え！？なんかあったの？」と、疑問を持ちつつ、玄関

に行ったのである。そしたら、そこには訪問メンバーの発表。そして、そこには、自分の名前があった。そして、一緒に応募した2人の名前もあった。あの日は、朝からテンションが上がってました。

(苦笑)

それからが、大変だったのである。訪問メンバーは、女・女・男の3人で、引率の先生も女の先生。男1人なのである。「俺、大丈夫のかな？やっっていけるかな？」と英会話よりそっちの方が、不安に思ってたが、準備してるうちに、それが当たり前になってきた。

(笑)それが、11月の話である。そこから、ほぼ毎日、英語で日記を書いたり、例文を見ながら勉強したりした。途中で、挫けそうになったりしたが、自分の目標を叶えるために頑張った。そして、平成25年3月18日にオーストラリアに向けて出発した。自分の住んでいるのは、蘭越という、ニセコの近くに住んでいる。そこから、新千歳空港に向かい、そこから、成田国際空港、そしてシドニー空港に行きました。

自分自身、海外は初めて。そして、10時間以上飛行機に乗ったのも初めて。何もかもが、初めてでした。そして、シドニーに着いたのは、次の日の7時過ぎでした。その後、続けて、オーストラリアの国内線に乗り、タスマニア島のホバートというところに行きました。そこに、交流先の大学があります。

空港から、真っ直ぐ学校に行き、施設を案内してもらいました。その後、ホームステイ先の人と会い、ホームステイの暮らしが始まりました。そして、何日間か学校に通いましたが、思ったことは、オーストラリア人は、時間にルーズってことだ。授業始まって、10分や20分遅れて入ってきても、先生も生徒も何も言わない。最初

は、びっくりしたが、約3日ほど居たら、慣れた。

オーストラリアの生徒とは、どんな感じなのかと思っていたが、色々な人が居た。自分から、話しかけてくれるフレンドリーな人もいれば、関わらないで欲しいとオーラを出す人。でも、多かったのは、フレンドリーな人が多かった。初めての海外で、緊張してたが、そのおかげでリラックス出来た。でも、英語は通じない時の方が多い。電子辞書を持って行き、それを使いながら会話すると通じたりする。あとは、身振り手振りを使って話すと、意外と通じることが多かった。そこで、伝えたいという気持ちがあれば、伝わるという事を学んだ。

その大学に約3日ほど通ったが、その中で色々な日本の文化を紹介した。基本は、大学の日本語クラスで紹介した。

その、日本語クラスは、日本語を学んでる生徒さんが、約20人弱居た。半分以上は、日本のアニメが好きの人だった。自分自身、アニメは、あまり見ないので、話についてくのが大変だった。そして、片言ではあるが、日本語を喋る生徒、そして、平仮名や漢字まで使う生徒さんもいた。今でも、メールや手紙のやり取りをするが、平仮名と漢字で返事を書いてくれる。それには、びっくりした。

その日本語クラスで紹介したのは、「着物」元々、学校に着物があったので、それを使い紹介した。色々な種類があったが、中には、バカ殿と同じような、金ぴかの羽織があったり、コスプレ用の忍者の衣装があったりと、色々な種類があった。歴史クラスや留学生のクラスでやったが、どのクラスも、興味を持ってくれた。

次に、「折り紙とあやとり」折り紙は、つるを折った。私は、つるを折る事が出来ないのだ(笑)さて、どうする?と思ったが、現地

で折り方を覚えて、教えたのである。あやとりも同じだ。これも、同じようにほうきも作ることができないのである（笑）あの、大雑把のオーストラリア人ができてる中、日本人の私だけほうきを完成することが出来なかった（笑）この二つは、私にとって、地獄だった（笑）そして、最後に集合写真を撮ったのだが、私だけ、あやとりのほうきができてないのである。

あと、メインとして、くるくるレインボーを紹介した。これを読んでもる人の中で、わかる人とわからない人が出てくると思う。インターネットで、検索すると出てくるので、そちらで確認してください。これは、凄く人気だった。オーロラテープが綺麗なので、クルクルすると、誰もがハマるおもちゃなのである。誰でも簡単に作ることができるので、大雑把のオーストラリア人でも、簡単に作ることができた。

という感じに、日本の文化を紹介したのだが、とオーストラリアでは、日本食も人気らしい。日本語クラスの生徒さんに聞いたら、意外と寿司が好きだという人が多かった。だが、びっくりしたことがある。パンプキン寿司が好きだと言ったのである。実物を見てないが想像だが、のり巻きの中身がカボチャなのか？是非、実物を見て見たかった（笑）そして、食べて見たいものだ。後日、シドニーで案内してもらった日本人ガイドさんによると、こっちは人は、なんでも巻き寿司にするそうだ。だから、照り焼きチキンや、照り焼きビーフなど、色々な巻き寿司があるそうだ。

色々な事を大学でやったが、どれもが思い出に残るものなのである。

そして、4日ほどタスマニア島でホームステイをして、ホームス

テイ先と別れ、シドニーに戻った。

ちょうど行った日の天気の最高気温は、30度。タスマニア島は、15度もないぐらい。北海道は、マイナスの世界。びっくりした。3月は、秋だと、言っていたから、少し寒いのかと思ったが、暑すぎた。ただの暑いとは、違った暑さを体験した。ガイドさんに聞くと、久しぶりに、暑くなったと言っていた。

シドニーでは、オペラハウス、シドニータワーなど、色々な観光名所を約1日で回ったが、回った中でも、1番記憶に残ってるのは、ボンダイビーチである。その日は、約30度。絶好の海水浴日和なのである。そして、平日と言うのに、たくさんの人で溢れていた。オーストラリア人は、ルーズなので、暑い日は仕事をしないで、泳いでる人も少なくないと現地のガイドさんが言っていた。平日の昼間なのに、凄い賑わいを見せていた。そして、シドニー空港に行き、最後となる長いフライトと戦い、成田国際空港に到着したのである。成田国際空港に着いた時に、感じたのは、寒いと言う事だ。まあ、オーストラリアは、夏から秋になっている途中。日本は冬、季節が逆になっているが、さすがに寒すぎた。そして、私は体調を崩してしまったのである。ずっと、頭痛と戦っていたのである。そして、北海道に戻って来た時は、雪があることに感動した（笑）今まで、雪があるのが当たり前だったから、感動したのである。

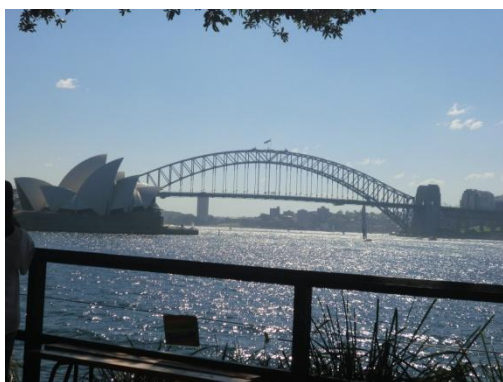
そして、蘭越へと帰ってきたが、その帰り道の車の中では、ずっと頭痛が治ることがなかった。そして、オーストラリアの旅は終了したのであった…。8泊9日は、長かったような短かったようなあつという間であった…。



あとがき

今回、本を初めて書いたが、初めての海外。緊張しまくりだったのは、今でも覚えています。でも、こんな体験が出来たからこそ、今の自分がいると思う。この体験をしてなかったら、自分はなんでも挑戦することができなかったと思う。この体験を通して、色々なことに挑戦することが出来ました。

あまり、文章を作るのが不得意ですが、最後まで、読んでくれてありがとうございます。



ハーバーブリッジとオペラハウス

Sydney にて 気温 30 度で、  
雲 1 つない晴天でした。





タスマニア島ホバートの民家。平屋建てが、一般的。

タスマニア島にボ  
ノロングパークでは、  
カンガルーと触れ合  
うことができます。  
その他に、コアラも  
触ることができる。





タスマニア島の  
アイドル！？「タ  
スマニアデビル」

## 「学ぶことの意味」

上野直幸

学校は、学ぶ所である。これは、自明のことであるが、最近は「学ぶ」という言葉の意味が各個人で差異を見せるようになったように思う。教えられて理解し身につける物、集団の中で自然に身につける物、様々であるが、学ぶことで成長していくことはまちがいないはずである。しかし、近年その学びの場でいじめがあったり、凶悪な犯罪があったり、本来楽しいはずの学校が危険な場所になっている。もちろん一部の話ではあるが、ゆゆしき事態である。安心して学べる環境を作ることは、何よりも急務である。

学ぶということの本来の意味を考えてみよう。「まなぶ」は、「まねぶ」つまり真似をすることから転じたとも言われている。動物の子は親のしぐさや餌の取り方を見て、生きる術を身につける。人も親の生き方や行動を見て真似をする。出来なかったことが出来るようになる。見えなかったことが見えるようになる。これが学ぶということだと思う。ただ、人が他の動物と違うのは、生きるためにだけ学ぶのではないということである。より良く生きるために学ぶのである。従って学ばなくても死ぬことはない。逆に言うと、より良く生きたいから学ぶのである。学校で学んだことや親が教えたことを十分身につけていなくても、社会で生きていくことはできるかもしれない。現代においては学ぶことは生きるための絶対条件ではなくなった。このことから、「学ぶ」ことの意味は多様化していったのである。この現象自体は悪いことではないが、多くの子供たちにとっては、学ぶことの意味を複雑にし、目的を失う原因を作ってしまったのかもしれない。目的を失い、不安になった子供たちは、家庭で甘えるか、外で群れるしかなくなるのである。家庭での甘えは

自立心をそぎ取り、他力本願な考え方を正当化し、社会で生きられない大人を形成してしまう。一方、群れは平和だと一緒にいる意味が薄れていくので、作為的に楽しいことや事件を引き起こす。その一端がいじめなのかもしれない。この時、学ぶことに意味を感じない集団は、過去の間人が作った道徳的観念よりも、今の自分が属する集団の論理が絶対的な意味を持つのである。それは、弱者を攻撃するという不当な行為を正当化する言い訳となる。その行為は、本来成すべき自己や集団の向上とはほど遠いものである。

しかし、子供たちだけを非難することはできない。学ぶことは真似ること。子供は大人の鏡である。家庭や学校で、親や教師は、子供や生徒に愛情を持ち、時に厳しく時に優しく進む方向を示せているだろうか。子供や生徒はその言葉や姿に感動し、こうなりたいと思うだろうか。もちろん、崇高なことを教えよと言っているのではない。教えるべきは、「人に対しての思い遣り」と「一生懸命生きている姿」である。そして、言ったことを実践することである。親と教師が、子供や生徒と真摯に向き合い、そのような姿を見せることができれば、時間は掛かるが「学ぶことの意味」が変わってくるかもしれない。

今大切なことは、私を含めた大人が、子供と共に本来の「学ぶ」ことの意味を思い出すことである。

## 北海道蘭越高等学校紹介

生徒が行く「オーストラリア留学」

校長先生が考える「学ぶことの意味」

2014年3月1日 発行

著 者 北海道蘭越高等学校校長 上野 直幸

北海道蘭越高等学校生徒 小泉 大地

発行者 上野 直幸／小泉 大地

出 版 らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Naoyuki Ueno/Daichi koizumi 2014

